

新刊紹介

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-09-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Shimizu, Tatemi, Naruhashi, Naohiro メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/00055449

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



新刊紹介

○ 西田治文：植物のたどってきた道 NHK ブックス 819 B6判, 218頁, 1998年1月25日, 日本放送出版協会, 830円。

故西田誠博士の「陸上植物の起源と進化」(岩波新書)の出版が1977年, 博士に松本までお出で頂き長野県植物研究会で「裸茎類—原始陸上植物」のお話をうかがったのは翌年の2月26日であった。日頃, 古植物に縁遠い私にとってその折りの講演は誠に新鮮であり, 忘れられないものとなった。この岩波新書は, 当時の私のゼミのテキストとして読まれ, 至るところに赤い傍線が入っている。それから20年, 今度は二世の著者が裸子植物を中心に据えて本書を出版された。

古植物学は一般には関心を持たれることが少なく, 学術雑誌や海外の専門書はともかく, 一般向きの啓蒙書もなかなか出ないので斯学の現状を知るのはむずかしい。この本は「第1章 被子植物は裸子植物の一部に過ぎない」から「第9章 “花の時代”の幕開け」の9章から成り, 縦書き一般向きで, 陸上植物の起源から現在, いや未来の被子植物に至る植物進化の道筋が, この20年間の古植物学の成果を背景に, 実に高度な内容を含みながらも分かりやすく述べられていて, 久方ぶりの名著出現の感が深い。特に, 親譲りかと思われるウィットに富んだ巧みな文章はほほえましく, 肩のこりをほぐして読ませてくれるのがありがたかった。クックソニアが維管束植物ではないこと, リニア状植物という分類群名, ユーリストマやスタムノスタマなどの前胚珠, ハイドラスペルマ型生殖, ジューンインパクト, ハボロハナカセキの発見の経緯やその正体など, そして前胚珠の形成過程や裸子植物の果実状器官に関する著者の独創的な見解など, 私には極めて斬新で印象的なものであった。かつての私の大学での講義がとても古く, いくつも誤りを犯していたのではと冷や汗をかく思いである。総じてこの本は20世紀末の一里塚どころではなく, 21世紀に向けての日本の古植物学の礎石をなすものいえるだろう。

欲を言えば, ライニーチャート植物の胞子体と配偶体の位置関係がはっきり述べられていないこと, ひいては“原始シダ綱”の顛末にふれられていないこと, かつて最古の陸上植物とされた *Cooksonia caledonica* が消えてしまったことは残念だし, 第9章に *Sammigueria* や *Furcula* が出てこないのも気になることである。また, スタムノステマの前胚珠の本文の説明と図は一致しないように思われる。老婆心ながら207頁の被子被子植物(?)はマンゴーではなく, パパイアである。(清水建美)

○ いがりまさし：野草のおぼえ方(下) フィールドガイド19 B6判, 263頁, 1998年7月20日, 小学館, 1,750円。

春の七草ハハコグサに始まり, 夏のワタスゲで終わった(上)に引き続き, ウスユキソウに始まりガマに終わる(下)が出版された。見開き2頁で1種を扱い, 左頁上2/3に植物の全形, 下1/3にアップの花の写真と解説, 右頁の上に覚え方, 下に近縁種の写真とその短い解説を入れるという体裁は(上)と全く同じで, 主題の116種に副題の185種を加えて301種が取り上げられている。(上)(下)併せると, 主題植物332種, 副題植物376種, 計608種にもなる。この数は日本(北海道—九州)の野生草本植物のほぼ1/5に当たり, 少なくとも身の周りの野草は大抵登場する。中には数は少ないが帰化植物も, 高山植物も含まれている。検索図や検索表はついていないので目的の野草を探し出すのはちょっと困難だが, キク科から始まりカヤツリグサ科やガマ科に終わる分類順に並んでいるので科さえ分かれば後は簡単である。名前をおぼえるという第一歩を踏み出したなら, 次はぜひともその野草とじっくりつきあって, さらに親交を深めてほしいというのが著者の願いである。(清水建美)

○ 福井県植物研究会(編著)：福井県植物図鑑①② 福井の野草(上)(下) A5判, 276頁・344頁, 1998年3月, 福井県植物研究会, 頒価2,000円・2,300円(共に税込み), 送料別。

福井県にはこれまでカラー植物図鑑がなかったが, このたび栗田幸雄知事の肝いりで福井県植物図鑑全5冊のシリーズの出版計画が決まった。このシリーズは, ①②に続いて③樹木, ④羊歯植物・海藻類, ⑤蘚苔類・地衣類が予定されているという。地方自治体の企画としては他都道府県に例がなく, まさに画期的である。そして, このほどはじめの2冊「福井の野草(上, 下)」が出版の運びとなった。

本書は1頁に原則2種の植物を入れ, 上下2段にわけてそれぞれ全形写真(時には花や花序のアップを併示)とそれぞれ生育地・習性・形態・花期・国内の分布などの記述, 部分的には和名の由来の説明を施すというスタイルで編まれている。取り上げられた植物は1350分類群というから, 県内の野生植物2300余の分類群の半数以上, 草本植物のほとんどすべてがカラー写真で見ることが出来るというわけである。中には, ごく

最近発見されたキョスミウツボ・ホロムイソウ・エビアマモ、最近学界に発表されたエチゼンヒメアザミやユキミバナも収められていて掛け値なしの最新の図鑑である。

本書は一般向きの図鑑として作られたため、分布論や県内分布の詳細は記されていない。これについては先に出版された渡辺定路氏の力作「福井県植物誌」(1989)と併用すれば、一層福井県の植物の理解が進むものと思われる。入手希望者は、福井県植物研究会(〒910-0006 福井市中央 2-8-27, Tel 0776-27-0220)に照会されたい。
(清水建美)

○ 八田洋章：ツリーウォッチング入門 木の見かた、楽しみかた 朝日選書 599 B6判, 294頁+索引頁 7. 1998年5月25日. 朝日新聞社, 1,500円.

昨今のアウトドア志向の中で、自然ガイドと称するガイドブックは巷間にあふれる感がある。これらは必ずといってよいほどカラー写真が主体をなし、カラー写真を写せば誰でもガイドブックが書ける世の中になった。そんな風潮の中で、本書は樹木生態の専門家として長年地道に観察を続けてこられた著者の手になるだけあって、内容の濃い他には真似の出来ない異色なガイドブックになっている。カラー写真は一枚もない。

本書は、縦書き、頁の上 1/3 に適宜に線画と著者自身の手になる白黒写真を配し、下 2/3 に一般向きに樹木観察の要点を綴るというスタイルをとる。文体は、語りかけるようなソフトな、そして控えめなデス調である。構成は、序章と終章を挟んで春・夏・秋・冬の 6 章立て、季節毎に変化する樹木の生き様が極めて適切な具体例を挙げながら、初心者にも分かりやすく意識して語られる。にも関わらず、内容は、開葉と展葉、雄性期と雌性期、一斉開花、花熟期と栄養成長期、頂伸と傾伸、単身複葉、假種皮果などの専門用語も随所に併用しながら、樹木の特徴が詳細に述べられ、成長枝と脱落枝という著者独自の見方にも触れるなど、大変高度なものとなっている。日本のソメイヨシノが 1 個体から広まったという見方や、ノリウツギの糊は繊維をくつつけるのではなく繊維が縮むのを防ぐためだとか、クヌギやカシワが冬季に枯れ葉を落さないのは常緑樹の名残りというのは私にとっても興味深いものであった。巻末に、一般の啓蒙書には見られない事項索引や植物名索引があるのもありがたい。ただ、花床筒と萼筒が区別されていないことや草には紅葉がないと言い切ってしまうなどの点は気になるところである。小さすぎ暗すぎでよく分からず、本文の内容と照合できない写真が若干みられるのも惜しい。

何はともあれ、初心者のみならず、専門の植物屋にも学ぶべき所の多い生きた樹木ガイドブックとして巷間に広く推奨したいと思う。
(清水建美)

○ 前川文夫：植物の形と進化 B5判, 262頁, 1998年10月30日, 八坂書房, 2,800円.

前川植物学が、幾多のユニークな卓越した発想で植物形態学にも分類学・地理学にも極めて強い影響を与えたことは記憶に新しい。解説の故西田誠博士が指摘されたように日本の植物学に初めて思索をもたらしたのである。先生のお仕事の内容は史前帰化植物、細胞の生活相、先行倍数性と後行倍数性、葉の起源に関する葉類説、カンアオイの分布と地史、古赤道分布論、日本のスミレ科・ギボウシ属・ラン科の分類、植物和名語源論などなど、“大いなる野次馬”(令息忠之氏評)よろしく実に多岐にわたり、発表された論著は数え切れない。先生の発想の底には常に“進化”の視点があった。今回、八坂書房の尽力により、これら多数の著作の中から主要な和文論著を選んで、3冊に編集して刊行されることになった。“植物の形と進化”はその第1冊である。

本書は、この表題のように植物の形と進化に関する論文とエッセイを収録したもので、大きく植物の形を考える部と植物の進化を考える部の2部にまとめている。論文は1948年の「芽の表情の示すもの」から1983年の「植物の種の決め方」まで35年間にわたる15編、エッセイは「葉は猫をかぶっている」ほか5編がコラムとして収められている。ニレ科やブナ科の托葉の形成過程を追った托葉起源論(1949)や大葉の多元性を主張された葉類説(1952)、欠けることによる進化の多面性の主張(1958)などは、40年を経た今日、読み返してみても新鮮さを覚えるのは私だけではないだろう。巻末の解説頁で故西田博士が指摘するように、DNAばやりの昨今、間もなく葉類F, S, G, Eを形成する遺伝子がつきとめられて前川理論が検証されるに違いない。中には、「草月」や「農大通信」などに掲載された一般には目につきにくい著作もおさめられているのもありがたい。折からわが家に飾られたセンリョウの実を眺めながら、最後のコラム「正月の植物」を読み終えたところである。前川植物学からの21世紀への贈り物として、若い世代に本書の一読を強く勧めたい。
(清水建美)

○ 根の事典編集委員会(編)：根の事典 A5判, 438頁, 1998年11月20日, 朝倉書店, 14,000円.

もう5年も前に計画された本書が、漸く日の目をみた。これはかつて限定的に出版された「根のハンドブック」(1994)のいわば改訂版でもあるが、扱われた事項や執筆参加者(112名)は格段に多く、形態学・生理学・生態学・分子生物学・遺伝学・育種学・作物学・園芸学・林学・土壌肥科学・農業工学・農業気象学など多岐の分野にわたり、「根と根を取り巻く環境に関する世界ではじめての網羅的な事典」(序文より)となった。

もともと本書は、1992年に東大農学部を中心に発足した根研究会にそのルーツがある。根あるいは植物の地下器官はこのところ多方面から注目される傾向にあり、1989年には国際根っこ学会 IARR (International Association of Root Research) が発足したし、昨年 1997 年には国際誌 *Stapfia* に根の特集号が出た。本書の出版はまことに時宜を得たといえることができる。

本書は事典とはいいながら、用語の個別的な解説ではなく、教科書スタイルで編まれており、まず大きく 1. 根の形態と発育, 2. 根の屈性と伸長方向, 3. 根系の形成, 4. 根の生育とコミュニケーション, 5. 根の遺伝的変異, 6. 根と土壌環境, 7. 根と栽培管理, 8. 根と根圏環境, 9. 根の生理作用と機能, 10. 根の研究方法 の10章立てとし、それぞれの章はさらに何段かの見出し、小見出しを設けて解説している。問題の性格上、農学関係分野からの執筆が大半であるが、根や地下器官の研究の現状が読みとれて興味深い。索引が充実しているので、「読む事典」としてだけでなく、「引く辞典」としても十分利用できるだろう。分類・形態学関係では、今市涼子、加藤雅啓氏らが参画しているし、私も地下器官に関する小文を呈しておいた。

(清水建美)

○ IAWA (国際木材解剖学者連合) 委員会 (編) 日本木材学会 組織と材質研究会 (訳) : 広葉樹材の識別 B5判, i-xx, 1-122頁, 1998年9月1日, 海青社, 2,381円。

かつて安全剃刀を使用し手で材を切ったことのある筆者にとっては、感激する本である。本書は、IAWA Bulletin n.s. 10(3) : 219-332 (1989) に掲載された E. A. Wheeler, P. Baas & P. E. Gasson 編「IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification with an Appendix on nonanatomical information」の日本語版で、名前(科、属、種、命名者)、解剖学的特徴(成長輪、道管、仮道管と木部繊維、軸方向柔組織、放射組織、層階状構造、分泌要素と形成層活動による変異、無機含有物)、付属資料—解剖学以外の情報、用語および索引からなる。

日本国内におけるデータベース構築と識別作業を共通のかつ統一的なものとする、および世界各国で進んでいる広葉樹材の顕微鏡的特徴のコード化の成果を正確に理解することのために出版したと訳者らはいふ。まさにその目的のための最適な本である。昔、筆者は結晶形の記載のときに用語の使用で苦労したが、その時にこの本があれば、すぐに解決したと思う。

科名や属名はどうするか、その場合は Willis (1973) や Mabberley (1987) を用いること等、他の分野の人にも役に立つことが書かれている。89-98頁の解剖学以外の情報(生態、比重、心材の色、木の匂い、心材の蛍光、水とエタノールの抽出液: 蛍光と色、発泡試験、クロムアズロール-S試験)は、林学などの応用分野にとって重要な事項である。巻末部にある英和対照木材解剖学用語は利用度の高いものである。

何と言ってもクリヤーな写真はすばらしい。樹木を対象とした研究者、特に解剖学を行う者に本書をお奨めしたい。

(鳴橋直弘)

○ 伊藤 洋(編) : 1998年版 埼玉県植物誌 A4判, 833頁, 1998年3月25日, 埼玉県教育委員会, 3,200円。

埼玉県で新しい植物誌が出版されたことを知って、注文したら、送られてきた本と請求書を見てびっくりした。大きくて厚い本で、今どき値段が3,000円台とは思えない。安い物を買ったと、一日嬉しかった。

県単位の基本的な植物誌である。本書は、埼玉県の自然環境 pp.15-34, 埼玉の植物概観 pp.35-44, 埼玉の植物 pp.45-730 (蘚苔類、藻類、地衣類、菌類を含む)、資料 pp.731-763, から成っている。高等植物のリストでは、学名、和名、分布、短い記載や区別点書かれている。分布図は、一括して pp.289-490 に載っており、各調査区(ほとんど行政区分と同じ)毎に1点の黒丸で示されている。

リストは、原則として今回の調査で採集された標本に基づくものという。そして標本は埼玉県立自然史博物館に収蔵されている。リスト作成のための正確な同定はいうまでもないが、基づいた標本の保管が公的機関であることは、今後の再検討の際に重要なことである。

(鳴橋直弘)

○ 小林禮樹・黒崎史平・三宅慎也：六甲山地の植物誌 A4変形判，301頁，1998年3月31日，神戸市公園緑地協会，5,300円。

兵庫県神戸市の背後にある六甲山地の植物誌である。3人の精力的な研究者の、足掛け6年に渡る成果の現われている良い本である。

本書は、巻頭カラー写真 pls.1-48，白黒写真 pls.49-56，調査地域の自然環境 pp.5-8，植物調査研究史 pp.9-15，植物相の特徴 pp.16-73，六甲山地の絶滅危惧植物 pp.73-77，生物多様性の保全をめざして pp.78-80，六甲山地の植物目録 pp.81-257，文献 pp.258-263，その他，からなっている。巻頭48頁のカラー写真は、その植物の生育地が分かるように撮られたものが多く、また、撮影のテクニックも素晴らしく、見ていて非常に楽しい。

本書の特徴の一つは、注目される植物として78種を取り上げ、各種毎に近畿地方における分布を明らかにしながら、解説している点にある。それぞれの種についての説明文は、野外調査と標本庫での調査の上に作られたもので、内容は濃く、有益である。高等植物のリストは、主に頤栄短期大学に所蔵されている標本に基づき、一部は他の公的標本庫のものを利用して作られている。各植物には、学名、和名、産地の地名、標本（採集者と標本の所在は略号）が書かれている。また、簡単なノートが付記されているものもある。（鳴橋直弘）

○ 滝 一郎：宮崎の山菜 A5判，211頁，1997年10月30日，鉾出版社，1,600円。

こんなものまでも食べられるのかと思うほど、一般的な山菜の本には出てこない植物が載っている。たとえば、オオタニワタリ、オニヒカゲワラビ、カテンソウ、クサギ、コナギ、コモチシダ、シロヤマシダ、シラネセンキュウ、セイトカアワダチソウ、セントウソウ、ツルボ、ナチシダ、ハンゲショウ、ハドノキ、ヒメワラビ等である。

宮崎県に産する野草や樹木の中から、食べられるもの100種を選び、植物の採取時期、生育地、食べ方、その他参考事項や薬効が書かれている。素人にも判るように、植物の写真と調理して盛り付けされた写真が、各々の植物に添えられている。

野草は野の菜と書き、文字から判断すると山から採ってくるのが本当の野菜で、農家が生産する菜は畑菜ではないかと、著者はいう。

学生に本を見せると、食欲がそえられるらしく、来年は野外で採集し、おいしいかどうか食べてみましょう、と言う。宮崎県に産する野生植物ではあるが、どれも一般的な植物なので、他県の方にも役に立つ内容である。山菜に興味を持たれる読者には一読を奨めたい。（鳴橋直弘）

○ 中池敏之：アジア産シダ植物分布図の索引 B4判，1-93頁，1998年，私家版。

この索引は、東京大学出版会発行「日本のシダ植物図鑑」第1-8巻の完成を記念して出版されたもので、アジア産のシダ植物の分布が載っている文献を扱っている。シダ植物の分布を知りたい者は、学名で引いて、その分布図の出ている文献と頁が分かるようになっている。学名はアルファベット順になっており、すぐに引ける。それぞれの文献は、著者名と発行年からなっているので、巻頭の簡略一覧表を見て、正確な文献と頁を知ることになる。学名の不明な植物も、巻末の和名から学名が分かるので、利用できる。シダ植物の分布を知りたい者にとっては、非常に役立つ索引である。入手希望者は、千葉市中央博物館（〒260-8682 千葉市中央区青葉町955-2）の著者に、送料込1,000円（切手可）で申し込まれると送本される。（鳴橋直弘）